ジョージア（グルジア）便り　その21

『再び踏むロシアの大地』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ロシアが誇るボリショイ劇場

無愛想なパスポートコントロールをおよそ2年ぶりに通った。旧共産圏の独特な雰囲気に背筋が伸びる。それは凍りつくような外気のせいか、いそがしいモスクワの人々の視線か、グルジア文字とは対照的で直線的なキリル文字のせいだろうか。いや、ロシアでの数々の苦い経験が僕を緊張させているのかもしれない。

バスに乗って市街地へと出ると、久々に大都市の空気に包まれ、身体がざわつく。小さな街トビリシから訪れたせいか、建物のスケールに圧倒されて、自分が蟻のようなちっぽけな存在に思えてくる。その中でも強烈な威光を放っていたのが「ボリショイ劇場」だ。バレエの殿堂、そして今回の僕らの公演の舞台である。空港のような厳重な警備の中、ボリショイ劇場の中へと案内された。入り組んだ内部の構造は複雑怪奇。職員でさえボリショイ劇場内で迷子になり2日間劇場から出られずに場内を彷徨ったという逸話がある、まさに迷宮だ。

迷宮をくぐり抜けるとロシア文化の中心、世界のバレエシーンをリードする舞台が目の前に広がっている。圧倒的な存在感を前に僕は只立ち尽くすばかりである。ダンサーにとってのボリショイ劇場とはそれほど特別な存在なのである。

ボリショイ劇場内の雰囲気はモスクワのそれとは一味違う。マフィアが暗躍し、政治的腐敗が著しいと言われるモスクワ。よそよそしく冷たいイメージのあるモスクワっ子であるが、劇場内は不思議なことに真逆である。すれ違う人は皆挨拶をし、仕事もテキパキとこなす。それはロシア文化を牽引し、ロシアを代表するという誇り、精神的余裕から発せられるものではないか。とにかく一人一人が唯一無二のボリショイ劇場を支えているという気概を感じた。

この日は稽古だけをつけて、歩いてすぐのホテルに戻ると、同僚が困った顔をしてあたふたしていた。どうやら劇場からのこの短い距離の間にスマートフォンを盗まれたようだ。

モスクワはメトロポリスだ。

文化の殿堂がある一方で悪が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）する世界でもある。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。